

2020.7.26 年間第 17 主日

天国ノムコウ

マタイ福音書 13 章 44-46

(そのとき、イエスは人々に言われた。)「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。」

説教

畑に埋まっている宝を見つけたら、そのままにして全財産を売って畑ごと手に入れ、宝を自分のものにする。

一粒の上等な真珠をみつけた商人は全財産を売って金をつくり、それを買う。天の国とはたとえていえばそういうものだ、とイエスはいいます。

わたしはこの「たとえ」はひどい話、独り占めの薦め、のように思います。

どうしてイエスはこんなずいぶんな話をするのだろう、と考えています。

そこで、福音書全体が「たとえ」だと考えてみました。福音書はイエスに関するの書物です。福音書を「たとえ読本」と仮定すると神の子イエスのたとえ話の合本が福音書となります。

神の子とは次のようにたとえられる。

1. 水をワインに変えた。
2. 足なえの人を歩かせた。
3. 水の上を歩く。

イエスの行った奇跡をちょっと抜き出してマタイ 13 章風にアレンジしてみました。奇跡を神の子のたとえという視点で理解することは科学万能の 21 世紀に生きるわたしたちには容易なことです。

また、福音書がイエスの「たとえ」だとすると、その種明かしを科学的にお

こなうことが意味のないこともよく理解できます。

イエスに驚き、怯え、讃え賞賛してきた人類の2000年の歴史は福音書全体の「たとえ」をどう読み解くことができるでしょうか。ある一人の人が目の利く真珠商人のように福音書の中から価値ある一粒、一節をみつけたとして、自分だけのものにするのでしょうか。マタイの13章46節を自分への天啓と受け止めたある人はそうするかもしれません。でもそれはある一部にすぎません。部分部分を切り取って解釈、読み解きが完了してもイエスの全体といえるでしょうか。

福音書全体を「イエスのたとえ」と受け止める地点まで人類がたどり着いているとしたら「天の国のたとえ」を突き抜けて「天国ノムコウ」が見えてきます。ことばでは伝えきれないことを「たとえ」で語るイエスのすがたを自分自身のなかにイメージするとき、わたしたちはイエスの目線のむこう、イエスの先をイエスと共に見ることができるようです。「たとえ」とおしてイエスが伝えようとした「天の国」、イエスが見ている向こうの世界をわたしたちも見ることができます。
